# 岐阜林友

大正四年十二月二十五日　第七拾四號　（毎月廿五日発行）（第三種郵便物認可　明治四十二年七月十日）


目次


▲研究
森林地被物に就て　樹の生長と降水量

▲論說
御即位の大典を祝し林友の改良を望む　校友會諸君に訴ふ　卽大典に就ての感想

▲文苑
稽程一千日　甲州に來てから　淡い追憶　修學旅行の感想　小品二篇　新體詩和歌

▲雜報
學校記事　校友會便り　會員消息　編輯餘錄


## 研究

### 森林地被物に就て

西澤靜入

農作物に養分が缺くべからざる如く、樹木の生育にも養分が必要なるものである、然るに、世間には往々樹木に對し苗圃事業の外養分を要せざる樣に考へ、林地の養分として缺くべからざる落葉下草を猥りに採取し、甚だしきは落葉下草は山林の副產物として採取すべきが當然にして採取せざるが損であるもの丶如く、恰も庭前の掃除せる跡地の如く、一葉一草をも容易に見る能はざる程度に、年々行はる丶結果、林地の生產力を減せしめ、且日光は地面を直射するに至り乾濕其度を失ひ、爲めに林木は勿論其他の雜草灌木の類と云へども減退し、遂には全く樹木の成育を絕ち恐るべき禿山となるに至る。

偶々吾人が諸所に目擊する所に依れば、非常なる瘠山若くは禿山の累々として一樹一木の生せる所或は其附近の地に於て、獨り神社佛閣の在る所に老樹は蓊鬱として繁茂し地味肥沃にして其間に植栽せる樹木も克く生長せるを視る。之等は畢竟其初めに於ては、何れも同じ地味を有し同じ林相を成せるも、一方は伐採後の植栽等には少しも氣を注がず、年々落葉下草等の採取を自由に放任せるに反し、一方は是等の採取を制限禁止したる爲めに、漸次堆積して肥料となり、斯の如き肥瘠の懸隔を生せる所以なり。

尙之等落葉下草等の有無は土地の肥瘠に關係を有する事に就き少しく述べんに、後の亨々たる樹木の生活成長する上には、養分の外に光線、溫度、水分等が必要なるものであるが、就中養分がりの重要なるものとす、然らば養分とは何ぞ、曰く樹木の種類に依つて多少の差異あるも其主要なるものは、彼の灰分となるべき加里、石灰、苦土鐵、燐、硅酸、ナトリウム、鹽素等と樹木の燃燒する際に逃散する所の炭素、窒素、硫黃、酸素、水素等を謂ふ。而して之等の營養分は彼の農作物の如く人力補給を仰ぐこと能はざるが爲めに、自体營養上缺くべからざる分量として、毎年其落葉、枯枝、雜草、根株等の新陳代謝の作用を營み、之に由りて自ら需給をなす、之れ天の配劑宜しきを得たるもので何人も克く知る所である。卽ち其營養作用は樹木の自生自活に必要なる落葉下草等は地上に堆積している中に、次第〳〵に日光溫度、濕氣の作用で硬質なる葉、强靭なる纖維は、腐植せられて多濕の海綿的の狀態となり、又腐植の際に種々の下等植物殊に菌類を發生せしめ、い

つしか母岩の風化したる基土と混生物所謂朽土(Fums)を作る、此朽土に依つて樹木は養分を攝收するものである。

斯く朽土は養分を樹木に供給する作用を爲すのみならず、又大に土地の理學的性質を改良するの効あり、即ち朽土は其堅密に過る土地を輕鬆になし、又輕鬆に過る土地を中庸になし、加之地表の溫度を維持する力を有し、又陽光と風とに依る地表の溫氣を發散するの作用を減じ、常に林地の適潤を保ち旱魃の害を免るゝの効あり、其他春期融雪の時或は降雨沛然として來たるも水分を保留して決して水量の急に流下せしむることなく、從つて土砂の流失、岩石の崩壞等の國土保安上恐るべきことも最も巧に且つ安全に保護し、以て國家經濟上、國土保安上に多大の利益を與ふるものなり、

以上述べたる如く、林地に於ける落葉下草等の有無は、實に森林の價値を定め、うの林木の生長量に大なる關係を有するものとす、然るに世間には往々樹木の生活上唯一無比の營養資料として賴むべき落葉、枯枝根株、雜草等の地被物を採收し、或は之が妨害をなす者あり、樹木寧ぞ克く善良の發育を遂げ得べきや、又土地何ぞ瘠惡なるを免がるゝを得んや、然らば之れを絶對に禁止すると云ふことは林業上有利なることなれども、農業の現況に徵し少しく許さないところであるが、元來我國の地被物採取地は比較的廣大に失し、極めて粗放的利用にして不經濟に土地を使用せしむることは事實であるから宜しく濫採に陷らぬやう保護を充分にし、更らに進んでは之等の林地に對しては、夙とに此弊習を改良發達を期せんが爲めには、廣く愛林思想の普及を計り植樹の保護に努めしめ、又適當なる施業の方法を定め、施業地と採取地とに管理區分し其採取區域外の林地よりは可成木材と樹實とを採取する外余分の落葉の採取下草の刈拂を制限禁止し、又採取區域内に對しては集約的の採取方法を奬勵し、一方には農業に必要なる柴草肥料に換ふるに人造肥料其他のものを以てし、其採取區域を漸次に減少し敢て無法の採取を行はざるに至らば林業上益々稗益する處大なるべしと信ず。（完）

## 樹の生長と降水量との關係

スチワート

嘗て余はEllawoorth Huntingtonの著、大木の秘密を讀みぬ同著者の研究及其趣味ある結論を讀みて余は余が近隣の檜樹の切斷口を觀測するに志しぬ之れ能ふべくんば過去に於ける降水量は直接に年輪の厚さと關係を有するが又年輪の厚さの觀測よりして吾人の記錄を有せざる年代の雨量の比較的數量を決定せんとする目的に出たるなり。

此檜樹は一九一三年二月に切斷せり斷口の觀測は同年七月と八月とに行ひたり其年輪の數は總數一三二ありき但し外部の七十五箇年につき觀測爲しぬ之れ内部は器械を以てするに非ずんば正確に計る能はざる程壓縮せられ居たればなり。

此七十五箇年に就きての結果は初め希望せし如くならずと雖も若し生長と雨量とは相關を示すを知りぬ只遺憾に堪へざるは雨量の記錄を此地より最近なる測候所ロチユスターより得たりと雖も同所は尙余が實驗地より北方二十五哩距り居ることなり勿論同測候所と余が地方とは其兩量相異なるは明なれども之を採用する外止むを得ざることゝす又年輪は時に一年に二個出來ることもきにしも非ず然りとせば計算の根抵を破壞するものなり又時に虫害の作用に由り生長の妨害ありしことも存せむ又其他の原因なきにしも非ずと雖も此等の誤算なきと假定し觀測せしものなり。

降水量の材料を研究するに年雨量は何等の効果を有せず之れ凍結せる地下には到達せざる降雪等あり而して植物の生育に關係を有せざればなり故に植物の生長期間の降雨量のみを比較するを要す。

『バーチヒ』氏に依れば檜樹の生長期間は四箇月なりとし『フリードリヒ』氏に依れば四月の後半に生長を初め五月を過ぎ六月の半



頃は稍割合に減ずるも夫よりして七月中は生長最も盛にして八月半頃に止むものなりと此事實に徵すれば六七月の雨量と年輪の厚さとの關係よりも更に密接の關係あるが如く見ゆるものゝ如し。

今其切斷口に就きて觀るに生長の中心點は眞の其材の中心より北西にありたり但し其中心より北方には鋸齒目を存し年輪を觀測するを得ざりき故に余の觀測したるは東方東南及南方の三部の半徑につきて行ひしものなり。

余は平均を此三半徑より取り而して之より得たるものを眞の年輪の厚さとなせり外部の年輪の狹きは其樹の生長緩慢なりしを示す。

溫度も試驗せしと雖も結局生長に關して熱の影響につき特に何の結論を得ざりき。

次に七十五年間の試驗の材料より左の事實を得たり此年代の間の年輪の平均厚さ四粍九なり。

『ロチエスタ』に於ける三月一日より九月一日に至る平年雨量は十四吋四六にして六七兩月の雨量は六吋二六なり。

三十一箇年の平均年輪厚さは五粍八强にして此三十一箇年中生長時期につき其平均一箇月の雨量四吋以上なりしは二十六箇年なりき但し平均月雨量は最多くと雖も三吋二一なりき平均平輪厚さ六粍五なるは十六箇年其中生長期の平均月雨量四吋五〇以上は十三箇年なりき。

平均年輪厚さ七粍二なるは七箇年其中生長時期の平均雨量四吋六〇以上は四箇年にして五吋〇以上の年は三箇年なりき。

今右に依りて見れば年輪の厚さは全數の七十二パーセントは平均厚さより大なるを知り又全數の六十一パーセントは生長時期の月雨量は六七月の平均雨量よりも大なることを知る。

又年輪厚さが四粍五より少き十三箇年に就きて見るに其三箇年は其生長時期の平均月雨量は平年の同期の雨量と同じく年輪厚四粍四〇より少きもの八箇年に就きて生長期間の雨量が平年の雨量なりしは只一箇年なりき。

### 結論

六七月の降水量の多少は檜樹の年輪の厚さに大影響を及ぼすものゝ如し即ち平均の厚より零粍五以上の厚さに減少あれば之れ夏季に異常の少き雨量なりしことを示す之れに反して厚さ增加し居ることは此例に見るときは六十一パーセントと適中し居るとは雖も必すしも特別なる多量の雨量あるものとは限らず。

併し何れの場合と雖も厚さと雨量とは正比例にて必ず變化するものなり只勢力を妨ぐる幾多の未知の原因例へば溫度虫害周圍い林木の狀態等ありて妨げらるゝを以て其比例を示す能はざるに由るものなり。

此等の結論を尙調査し且つ進んで研究し幾多の同樣なる實驗に依りて其觀測所に近き位置の樹にて觀測せば其以前の時代の降水量の記錄を推定することを得む。

T H生曰く本記事はもとMonthly Westher Review, Yol, 41, No 5に掲載されたるを山田某氏が氣象集誌に抄譯したるものなり

## 論說

### 御卽位の大典を記念し林友誌の改色を望む

緣山坊

維持大正四年十一月十日萬世一系の我が天皇陛下には山紫水明の舊都に於て三種の神器を繼承あらせられ御卽位の大典を擧げさせ給ふ生等生を聖世に享け此の千載一遇の盛典に遭ふ嗚呼何等の幸福ぞや。

生等は將に將來國家の中堅となるべき青年なり國家の將來を考へ青年の責務を自覺し陛下の御主旨を奉體し倍々奮鬪努力し皇運をして彌々無窮に榮えしめん事を期せざるべからず願ふに歐洲の天地戰雲猶結んで解けず民人の慘禍測り知るべからざるものあり獨り我が國のみ既に外敵を挫き干戈遠く收まりて忽ち此の佳節に逢ふ天の祝福を我

々日本國民に降す一に何ぞ斯くの如くなるや生等之を思ふの時坐に感激の涙無き能はず此の秋に當り輦轂の下を始めとして地方の都市は云はずもがな薪樵る山里鹽燒く濱邊に至るまで此の空前の大典を記念せんとして各種の記念事業を起すの譽あるを聞く誠に宜なりと云ふべし

僕四五日前店務を帶びて西新地方に出張し本日歸所せり其の間通過せし村落の模樣を聞くに紀念事業として道路の改修を企つるあり水利を修め灌漑に便せんとするあり青年團事務所を建つるあり紀念倶樂部を新築せんとするあり其他是に類する美舉大小枚擧に遑あらず然して是が衝に當る村民の熱心なるや實に余の意表に出でたるものあり交通不便にして社會の進運に後れたる山間僻陬の地にして既に此の如き美舉あるを見聞す誠に聖代の餘慶と言ふべし

飜て五百有餘の校友を有し帝國林業界に重鎭たらむとする母校は此の秋奈何なる計畫あるか？幾多群小の實業學校と異り創立以來帝室とは因緣淺からざるにあらずや僕熟熟考ふるに母校の如きは東は北米の野より西は馬來半嶋の山中に到るまで廣袤約六千里の間に幾多の校友を有する學校にありては斯かる空前の大典を紀念する事業を起さんと欲するも各人の意を滿たすに足るべきもの甚だ少し縱令ありとするも多額の費用を要し且つ將來維持經營の困難を感ずるが如きものにありては斷然排斥せざるべからず此の秋に當り輦轂の下を始めとして地方の都市は云はずもがな薪樵る山里鹽燒く濱邊に至るまで此の空前の大典を記念せんとして各種の記念事業を起すの譽あるを聞く誠に宜なりと云ふべし

僕四五日前店務を帶びて西新地方に出張し本日歸所せり其の間通過せし村落の模樣を聞くに紀念事業として道路の改修を企つるあり水利を修め灌漑に便せんとするあり青年團事務所を建つるあり紀念倶樂部を新築せんとするあり其他是に類する美舉大小枚擧に遑あらず然して是が衝に當る村民の熱心なるや實に余の意表に出でたるものあり交通不便にして社會の進運に後れたる山間僻陬の地にして既に此の如き美舉あるを見聞す誠に聖代の餘慶と言ふべし

飜て五百有餘の校友を有し帝國林業界に重鎭たらむとする母校は此の秋奈何なる計畫あるか？幾多群小の實業學校と異り創立以來帝室とは因緣淺からざるにあらずや僕熟熟考ふるに母校の如きは東は北米の野より西は馬來半嶋の山中に到るまで廣袤約六千里の間に幾多の校友を有する學校にありては斯かる空前の大典を紀念する事業を起さんと欲するも各人の意を滿たすに足るべきもの甚だ少し縱令ありとするも多額の費用

## 校友會員諸君に訴ふ

岐蘇　仙人

世は日を追うて文明に進むは事實なり。然れども只形式的の文明にして精神的の文明にあらず。物質的文明の餘弊の及ぶ所堅實なる士風頽廢して輕佻淫靡の汚風漸く世に普からんとす故に外觀甚だ美なりと雖も其內實は却て醜陋を極む此處に於て此の惡弊を除去するに非ずんば國家將來の爲め實に憂ふ可き事ならずや。

夫れ青年は國家の英華にして社會の基礎也其基礎腐朽し其英華凋衰するあらば何に依りてか健全なる國家を形成するを得んや是に依りて見れば吾等の任務重且大なりと云ふ可きなり。

然るに現今の青年社會を見る可し眞に下民を思うて劃策する爲政家ありや。眞に學生を愛して訓育する敎育者ありや。衆生の墮落を救ひ國家の風儀を正さんとて心を碎く僧侶ありや。皆惟れ生臭坊主にあらざるなきか。無實の罪に泣く弱者の味方となり權者の橫暴に苦む小民の力となりて義の爲め道の爲めに渾身の熱血を灑ぐ辯護士ありや是又コンミッションの迷ひ兒たるに過ぎざるなり。道路に迷ふ孤兒のために我は飢寒に叫ふ貧爺の爲めに一掬の慈愛の涙を揮ふ德者ありや。偶々これありと雖も擧世滔々として名刺に走り驕奢にあこがれ自己の爲



めにのみ計りて他を惟はず互に反噬し陷擠して國家の前途將に暗憺たらんとしつゝあり。

斯の如く上に赤誠の士少くして何んぞ下に力行の民多からんや善民よく勤むと雖も尙ほ生活難に苦悶し奸人能く怠ると雖も尙ほ驕奢を極むるを得茲に於てか都鄙凡て華奢淫靡に傾き放佚遊惰に流れ貨財日々に空乏を告げて怨聲將に四方に揚らんとす。誰か起つて此悲境を救ふの任に當るべきものぞ是吾々青年なり敎育者諸賢なり。

噫！力と賴む青年も心に待てる敎育者も社會の風潮に超脫し逆行する事能はずして齊しく物質の慾望に腐心す。學ぶはこれ金權を求めんが爲め敎ふるものこれパンを得んが爲めにす。多聞に誇る學生あり。多識に驕る敎育者あり。然れども

人生の眞義を悟り己が使命を自覺してこの國の爲めこの學生の爲めに衷心同情の心を以て劃策し實行する者うれ少きを如何せんやである。

嗚呼青年の理想高からず敎育者の覺悟堅からず互に妬み互に譏り共に迷うて墮落の底に沈むいかにしてこれを救ふべきか思うて茲に至る毎に憤慨の涙禁ずる能はず已まんとして已む能はざるなり。

眞に國を憂ふの青年世を思ふの敎育者互に奮起し互に提携して相呼號して以て君國の身爲めに命を捧ぐるに至りなば國家の幸福といふべきなり。

即ち吾々青年は既に世の青年子弟の儀表だるべき諸なるを以て今や知識の食傷學堂に滿ちて憂世の高士隻影なきの今日憤勵一番起つて高樓の曉鐘を撞き長夜の惰眠を覺醒せん哉……

然らば懦夫も亦風を望んで起る事期して俟つ可きなり。

うれ我が親愛なる校友會員諸兄須らく自重せられよ（大正四年十二月七日）

## 御大典に就ての感想

白木老雄

維れ時大正四年は申すも畏きことながら實に我々六千萬民草の最も誠歡誠喜すべきの歲で有ると共に又最も自重自警すべき一ケ年であつた。

今春來後の閣臣の不德なる乎將た又在野黨の非望なる乎其の何れにあるかはいざ知らず我が政界の爭は一日も止月す數年來の政爭は大隈內閣となつてより更に復た紛糾を繰返したことは其都度新聞雜誌によつて報導せられ世界の耳目を聳動せしめた。而して又財政の謬れる乎或は又商業の振はざる乎其の何れに原因するやは兎も角も不景氣は年一年毎に逼迫して終に國を擧げて盡く破產するに非ずやと迄杞憂せらるゝ程に行詰つたが然し　今上天皇陛下の京都に於て振古其の比を見ざる我國至重至嚴の盛典を擧行せられ國民は皆歡喜の色に滿たされ齊しく皇室の尊嚴なるを仰視して政爭も不景氣も此皇威八紘に輝く榮光に照らされて雲散霧消し諸外國に對して誇るに足るべき大典を無事に濟まして茲に目出度大正四年の終りを告げんとするのである。

さて此目出度き御盛典を如何に記念すべきかに就ては已に早くより論議せられ今は着々と其實行期に入りつつあるが抑々記念なる言葉は其事を長へに記して忘れざるのかたみとして之を永久に保存するの謂ひなれば事業の性質をも吟味せず矢鱈に大典記念の文字を冠して以て其外見を飾るが如きは最も愼むべき事の一である例へば平凡なる著書に『賜天覽』とか若くは『賜乙夜覽』などの題字を濫用するが如く又如何はしき商人の『宮內省御用』の看板を濫用するが如き實に其の度に過ぎたるものと云ふべきであるたとへ如何なる事業又如何なる物品にても永久に殘りをへすれば可なるが如きものの實は然らず大典の二字を冠する以上は大典の大典たる所以を良く了解して最もうれを記念するに相應しい性質の事業と選ぶの要がある哉れが爲全國のあらゆる團体又個人としても總ての方面に諸種の事業を企畫すれども就中夫に最も相應しき事業はと言へば物質的事業よりは精神的事業一時的事業よりは永久的事業部分的事業よりは一般公共的事業を以て最も可なりとするのである

思ふに我が明治維新は實は千古の大事業にして大正聖代の今日あるは　今上陛下の御稜威に依るとは申せ　明治天皇の英斷明德による明治維新の事なきに於ては今日の國運の隆盛は見られなかつたのである。されば我々微臣たるものは大正聖代の今日あるの所以を知り且つは今日の盛典を機會として人心一新の氣運を開き即ち大正維新の意義を明かにして人心の嚮ふ所を一にして擧國一致國力の充實國運の發展を期するの策を立て着々其實行に入るを以て我國家的一大記念事業即ち物質的又一時的部分的ならざるの事業としたのである。此れ實に今回皇恩に浴せし我々國民の自覺すべき一大事である余は一昨年在鄕中一親友と協力して六年以前よりの小學校卒業生の同窓會を設立し兼ねて其際宿案として御大典記念事業の一なる基本金蓄積及廻覽文庫設置の件を提出し置きし處其後余は遂ひに遺憾ながら鄕里を出でて木曾に住む身となつて暫く其消息に疎かりしに會員が臥薪嘗膽の結果漸く基礎確實となり其事業さへ本年に至りて實現成功するの快報を余は耳にすることが出來た思ふに小學を卒へ社會に出でし後も尙ほ讀書力に依つて現代の思想に接し益々德を養成し以て國家に貢献するの素地を作ることの至要なるは言を俟たざる所で一小事業とは云へ自分等が計畫した其端緒についた快感は實に禁ずる能はざる所だ。因て御大典について聊か愚感を記して本號の紙面を穢した。（完）

## 林業家として渡鮮せんとする諸君に（二）

星　加　正　雄

扨て前號で申上げた通り又本號にあらはれて暫く諸君の大切な多忙の時間を拜借しようと思ふのでありますが何分文才に乏しい僕の事であるから諸君の御滿足を買ふと云ふ樣な事は絶体に出來ないのです殊に僕は今此の問題を解答するに當つて自分ながら切齒して已まないのは唯一つある此れ即ち材料でありますが僕は在鮮當時に於てもう少し斯の道に就て精密な調査或は研究でもして居つたならば寔によい仕合であつたが殘念なことには其の當時僕にはまだかう云う方面に於ては何の趣味もなかつた此れが今となつて僕の在鮮當時の失策であつたことを了解することが出來たのである。

若し僕が林業視察と云ふ目的のもとに旅行でもしたのであつたならば充分此の題目に就いて答へることが出來て居つたかも知れないのである。

而し今はもう過ぎ去つた昔の事であるから如何に悔ひても歸らぬ事で敢て嘆く必要はないのであるが僕は今諸君に朝鮮を紹介するに當つてたつた一つでも多く參考になる樣にと云ふ一念より生じて過去を偲んで天に叫び地に悔ひて已まないのである。

此れに依つて見れば如何に僕の思想は狹小であるか將又朝鮮に於ける林業の前途は如何に有望で如何に豊富であるかと云ふ事に想到せらるゝであろうこで僕が申し上げる事は至つて少部分で誠に數にも入らない位であるから僕の筆以外の事は讀者諸君の御高察に預らねばならないのである。

かう云ふと有志諸君に於ては今迄頼んで居つた渡鮮論ももう駄目だと失望せらるゝ方も中にはありはせんかと竊に僕は諸君の御機嫌を伺はざるを得ないのである而し此の渡鮮論は決して左樣なものではない抑々此の渡鮮論なるものゝ目的と云ふのは然も朝鮮に於ける將來の林業の覇者は本邦唯一然も榮譽ある我が山林學校の卒業生の手にのみ依て斯業を經營するを期するの外はないのであるかう云ふと或は何ぞ此れ大言の甚だしきと中には口號む人もあろうが諺に曰く一寸の虫には五分の魂を有すと今此の一語を味ふときは又本論の與一入ならんかと思ふのである此に餘言を加へて本文の短を補ふと共に讀者諸君の御同情を乞はんとするのである。

次號よりは愈々本文に移る考へでありますが辛ひに諸君目出度き御代の新春を迎へられよ。



## 文苑

### 誓程一千日（其二十）

曾山子

若葉かげ古きを誇る一葉哉
秋くるゝ一羽遲れて雁の行く

十二月七日　上山田溫泉客舍にて

『以上を以て姑く擱筆。機を見て再び誌上に相見ゆる有らん乎』

### 甲州に來てから

佐伊塔

▲甲州に來てから　最早一年になる信州の北の方の白馬山麓の山ふところに生れて木曾に三年過したと云ふより他に世間を知らない僕には甲州は富士の國―水晶の國―葡菊の國―身延山位より他には何も知らなかつた其れが甲州へ來て見れば隣合せて居るだけ矢張り種々と關係が有る信州の南部の人々と甲州の北部の人々とは聯合して教育會も設立されて居る言葉も信州訛りが有る信州の人々も大分來て居る母校に敎鞭を取つた人々もある母校を出た人母校に現在籍を置く人之等を合せると二十人もある殊に甲州の樣な小さい縣が笹子以南を郡内と云ひ以北を國中と云ふて相互に郡チイ者が國中モンがと云ふ樣な事を云ふのも何かこう信州の人々が南信が北信がと云ふのと似て居るかと思ふと面白い樣な氣がする

▲甲州に來てから　一年になる其の大半は出張して暮したが其先々が山と云ふ山川と云ふ川が皆荒廢して居るのは實に驚いた豫て先輩の人々の話にも『甲州の山は赤い青い山は見たくも一つもない』こんな話を聞いて居つた其れ程一つもない事もないが禿山の多い事は事實だ毎年大水害の有るのも尤もの事と思ふそして其の水害の爲めに流し出された大岩が今は一つの名物石となつたり一丈以上もある樣な鳥居か頭だけ一寸見える許りになつて埋もれたりしたのは木曾あたりでは見られない圖だ

▲甲州に來てから　私は初めて恩賜縣有財産管理課と云ふものを知つた他の縣にも林務課はあるがこふ云ふ課の有る縣は他にはない本縣には恩賜縣有財産と云ふ物が有て之を管理する爲めに設けた課である此恩賜縣有財産と云ふものは山梨が累年水害に合ふのを憫然に思召され明治四十四年畏くも帝室より縣有財産として御下賜相成たるもので公簿面積は四十萬六千四百四十二町歩を算し實測見込面積拾九萬七百拾九町歩と云ふ宏大なものである（事業沿革等は何れ稿を改めて）

▲甲州に來てから　眞に同窓の人々のなつかしみを知つた殊に私の樣な世間を知らないものが旅に出ては如何に蘇峽會と云ふ樣な同窓生の會合を力强く思ふか然しかうした會合か動もすると餘り先輩とか后輩とか云ふ樣な階段を作つて所謂人倫五常の道に適はせ樣とする爲めに―蘇峽會にはないが―溫情を失ふ樣な事のない樣にしたいと思ふ蘇峽會は第四回生の矢島君が創立されて以來前田君小羽根君島田君宮川君其他の諸先輩の御盡力で益々隆盛に趣き殊に今春以來中嶋宮川原田の三君ぶ幹事となつて活動して下されて益々健全なる發展振りが表はれて來て其れにしても吾々の樣なナラズ者が有つては先輩諸君の肩身を狹くする事のみ多いのと思ふ（郡チイ秋山山中の天幕の中にて十一月七日）

### 淡い追憶

M　I　生

うれはもう五年も先きの暮れ秋の事である私は或る用事を兼ねて飛彈の高山へ旅行して三日ばかり逗止した。一日私は旅のつれ〳〵に此の町の公園へ登つた。此の公園には廣瀨中佐の銅像がある、私はうの銅像の前に立つて寂しく暮れる山の町の景に見惚れてゐた。

折柄一人の婆さんが六七才になる女兒を先に立たせ、風呂敷包を提げさせて、喘ぎ喘ぎ登つて來た。うして彼の風呂敷から餅らしものを取りだして銅像に手向け跪いて何事か一心に祈念して居たが、やをら立つて私の方へ歩み寄り例の風呂敷から餅を取りだして一面識もない私に『不味いもので御座

いますが一つ――』と云つて差出したうして婆さんは私が聞かない事までり語り出た『俺の倅はこの御方にはらいお世話になつたがとう〳〵斯の子を殘して死にました……』と言つて銅像と彼の女兒とを顧みた。だん〳〵婆さんの話を聞いて見ると、其息子とふなは去る日露の戰に南山とかで戰死したとの事である。それにしても彼の息子は陸軍である樣だが廣瀨中佐に世話になつたと聞いて私は訝しく思つた。だん〳〵話して見ると婆さんは廣瀨中佐が海軍の人であるか陸軍であるか知らないが唯豪い方であるから多分大きな厄介になつたことであらうと敬慕の餘り老の身も厭はず斯うして参りするのだと知つて私は一入氣の毒でならなかつた。『子に先き立たれた俺も不仕合じやが俺よりこの兒が餘つぽど不仕合ドや』と子供の頭を撫でながら何處の誰とも知れない而も子供であつた私に心の悲哀を訴へる樣に語つた。もう考婆の双眸には露を宿してゐる私の眼にも……。

私の眼にも涙は浮んだが幼い私にはこれを慰めるべき言葉を見出さなかつた。

傍の兒供は目をぱち〳〵とさせ怪訝な顔して私と婆さんとの顔を見くらべてゐた。

此の何も知らない子供の無邪氣な顔は婆さんの涙よりも一層私に悲哀を感せしめた。

西の山に入りかかつた日はこの一場の悲劇を横ざまに照して銅像と老婆と小娘と私との四つの哀れな影を地に投げた。日が次第に沈むにつれて四つの影は次第に淡くなつて遂に掻き消えた。日が沈んだので丁度光源がなくなつてこの悲劇のフイルムが投寫されなくなつたかの樣であつた。然し私はこんなフイルムがこの上續くのを望まなかつた。

風か荒ぶ頃になると私は夕暮など能くあの可憐な小娘の無邪氣な貞が髣髴する。

## 修學旅行の一感想

秋星生

理想の夢に憬れて前途に洋々たる希望を懷き。耀々たる成功に光明を望む青春の學生にとりては、他郷の旅行は殊に大なる愉快の一なるものならん。

吾人今春下野の山河を踏破して、其自然の美の秀麗なる其人工の美の華麗なるに接し又其人情鳳俗景況等を味ひ得て、得る所亦些少にはあらざりき。

日光の勝地より、大谷川を溯り中禪寺湖畔に出でて、更に足尾に出で銅山に接せる間、吾人をして最も痛切なる感を懷かしめしもの一あり、蓋し日光の地に人工の精華自然の瑰麗に醉ひ、日二日を經すして足尾の地に至り、其實に活地獄の有樣なるにあひて、餘りに逕庭の甚しきに只茫然たらざるを得ざるものありき。

那須原を蔫然北に走り、更に西に馳せて、日光の地に入り、まづ驚倒せしめられしものは、四圍の山野を掩へる鬱々たる杉の林杉の並木なりき、然るに日二日を隔でゝ足尾に入り、先づ唖然たらしめられしものは赤裸々たる其の四圍の山なりき。嗚呼以て其全況を窺ふに足らんか。

日光の町に車道あり、足尾の町に亦車道あり、されど、日光は清楚たる電車の、着飾れる遊覽の客を乘せたるに、足尾のは泥にまみれたる荷馬車の損ねたる器具鋼鑛を運搬するなり、又以て其市街の景況の雲泥の差あるを推察するに難からざるなり。大谷の川は萬綠すべて鮮なる間を縫うて、其清楚なる流を日光の傍におくり、其上は雄大豪宕なる華嚴の瀑となり、或は含滿の淵となり、以て日光山の自然を現出せしむ。然るに渡良瀨川に至りては赤裸々の山間より足尾の町に出でて又赤裸々たる溪谷を縫ひ、其自ら赤褐色に化せる流を送りて陰鬱なる足尾の町を一層荒涼ならしむ。

日光には本邦美術の粹を蒐めて、壯嚴海内に冠たる東照宮の建築あり、以て市街の清楚なるべきを知らん、然るに後者には其製錬所圓筒より常に五彩の雲を噴き出すを見るべく以て市街の陰鬱なるを見ん。

吾人の日光に遊べる日は晴天なりき又足尾を觀覽せる日も同じく快晴なりき、然るに



前者は實に長閑なりき、然るに後者は實に險惡なりき、即ち前者は陽氣なりき、然るに後者は實に陰氣なりき、此れ果して我情の然らしめしものなるか、或は時日を異にせる故なりしか、皆然らず、四圍の景況の然らしめしものなる事論を待たざるなり。

日光の町に、外人あり遊覽の客ありて、土地の風俗も自ら華奢なるに、足尾の朝には顏色憔悴し形容枯槁せる坑夫の、破衣をまとひカンテラを携へ臂に蓙あてゝ、力なげに坑口に赴くあり、夕には、又家路さして歸り行く憐なる其姿を見るべく、六里を隔てざる日光の地のあの長閑なるに比して更に憐憫の切なる情湧き出でて轉た人生の不遇を痛嘆せずんばあらざるものありき。

余等の日光に宿りし夜買物に出でゝ店に立ち寄れるに、奥にては幼き女の三味を鳴らして唄ひ稽古に餘念なかりしを見たり、町を散策して、人々の服裝を見言語をきゝて吾人は日光の華美なる風俗に一の印象を止められき、かくして足尾の町に寂しげに集へる小供等にあひては、日光のあの華なると反映して荒涼たる鄕土の中に、いとけなき時代の生活を無意識の中に送る幼兒等に同情の念禁ずる能はざるものありき。

足尾に入りて、赤裸々の山麓茅舍の列れる裏の方にありて、寂しげなる墓の羅列せるは只さへ心地惡しきに其頗る多きを望み見ては日々黄泉の客となる人々の夥なりときく足尾の町の悲慘を聯想しその生新しきもの丶点綴せるを見ては、昨日今日悲慘なる最後を遂げけん坑夫の身の上も思ひ出されて憐のきはみなりき。

此の如くして、日光の地は總て陽氣なり、長閑なり、足尾の地は陰氣に、寂莫に、陰惡なり、六里を隔てざる地に此別天地を見出す、噫又感無量ならずや。

而して日光は其盛名海内に冠たる日本の名所、足尾は世人の熟知せる我著名なる銅産地而して一は以て遊覽の客を吸收し、一は其銅を産出する噫何ぞ其逕庭の大なるや。

日光の人を好運なりとせば、足尾を實に不運の人なりと言はんか、日光の地を仙境なりとせば、足尾の地を活地獄なりと言はんか、吾人は日光の地を仙境なりと稱するが故に、足尾の地を比して陰氣なる陰惡なる地と言にはあらず。足尾は極端なり、即ち殆ど活地獄の觀あり、日光も又極端ならんとす、日光に遊びて人工の華麗に醉ひ自然の秀美にあはば誰か又我ユートピヤなりと讃稱せざらんや。

花咲き匂ふ春の日も、錦織りなす秋の日も日光の地には常に自然の美の巡り來るにあはん。

噫、されど、足尾には花の美も錦の麗もなし、而して渡りたる宵、日光の山に佇みて大谷の清流に映る月の影、日光山の緑の影を俯し眺め、靜けき宵を傳へ渡る大瀧小瀧の響に醉はゞ、恍惚として己を忘れ陶然として己を失はん。

あゝ。されど足尾の月は夏の宵も秋の宵も赤裸々たる其山を照し寂寞たる其墓を照して、荒涼寂寞たる溪谷を現出するならん長閑き春の日光の地を出で、寒煙荒草滿目蕭條たる足尾の地を出でゝ、立ちのぼる淺間の噴煙を打ち仰ぎ千曲の清流を俯瞰して再び我が故郷に入り、吾人は又我郷土の自然の秀麗に平和に、喜悅の情感謝の情の津々として湧出づると共に、依て以て心の底に一の雄猛心奮鬪心の振起せらるゝを得ざるものありき。（完）

## 小品二篇

喜多村弘

### 夜

寛の水の音たゞ〳〵に聞ゑて物淋し、瑠璃の如き空には月未だ昇らず。銀沙の如き星のみ、キラ〳〵と輝き、遠き山は黛を帶び近き山は霞のかゝりたる心地す。人影絶ゑて聲なし只犬の遠吠かすかに聞ゆるのみ。

一陣の木枯し吹き來りて我が顏を洗ふ。

### 夕べ

夕陽將に沈まんとして滿天紅し、塒に歸る群鴉の聲雜然としてさわがし、鍬かつぎつゝ家に歸る農夫の影淡し。彼方の家よりは夕餉の仕度にや煙片々として昇る。秋風吹き來りて枯木をならす、空の一隅に現れた

る一片の雲其の行衛を知らず。

## 新体詩

△友の死を悼みて　華村

花の晨の月の夕
共にかたりし吾が友は
希望の花をかざし得で
あはれもろくも散りにしか
花咲く春はめぐり來ん
青葉すゞしき夏も來ん
されど哀れや吾が友の
歸る日はなし長へに
秋は來りぬ山々の
百千の木々は紅葉して
囀る鳥の聲高し
されど語らん友はなし
君と歩みし畦道に
啼く蟲の音にゆら〳〵と
紫匂ふ桔梗花
ほゝゑむさまのいとほしや
人生の春の悲しみを
知らで笑ふかやよ桔梗
心もあらば笑まずして
逝ける吾が友悼めかし

## 和歌

△短歌日記より　加藤ゆかり

氣まぐれにコスモスなどを摘み居れば
狂女お寅のあざ笑ふ秋
夜歩きの胸にせまれる青柳塀の黒きがもの哀しかり
枇杷の花散り初む頃ぞ故郷はわれ待つ母の柿熟みにけむ
秋逝く日山にのぼれば町裏に大根の畑の眞青きが見ゆ
しめやかに風よぎる丘に物思ふわが身をつゝむ草の香ぞする
午後の太陽は明るくさしぬひと時を木立に吾れは風聞きてあり
みづ掬めど木立にたてどよき思ひ浮ばぬ吾れに夕暮るゝかな
みそれする夜を山近き家にして淋しき音を聞き盡しけり　喜多村弘

△秋風吹けば

遠寺の夕の鐘も何となくしめりを帶びぬ秋風吹けば
萩桔梗裾野分け行く旅人の駒の手綱に秋風ぞ吹く
はら〳〵と木の葉三つ四つ又五つこぼれ落ちけり秋風吹けば
今日も亦夕日の窓に泣きぬ我れ秋風吹けば只哀しかり
ころ〳〵と悲しげに鳴くこほろぎの聲に秋をば覺えけるかな
秋の夜を我がかげ踏みて野路ゆけば千草の中に鈴蟲のなく

△初冬雜題　横井正風

山里は只淋しさに黄昏れて炭燒く煙細
うたなびく
病む友に藥すゝむる初冬の夜半を淋しく時雨降るかな
風に散る落葉の行くへ眺むれば飛彈の山なみ雪ふりにけり
枯野原吹く夜嵐に月さへて駒の嘶き寒うきこゆる
熊笹の一路は遠く囁きてあはれ猿の月になくなり
霜白き星の板橋わたりゆく車の音のいや高きかな
力なき冬の日足はかたむきて越路の里は雪眞白なり

○　奥村嶺月

暮れてゆく秋を惜みて鳴くもずに淋しさ添ふる山寺の鐘
ちら〳〵と降りくる雪もおのづから年の終りを知らせ顔なる
過ぎし秋健かなれと別れたる友は何處に年送るらん

## 俳句　内田しら菊

僧ひとり杖つきもどる枯野哉
ボテ會もすんで霜夜の話かな
ゆきの花咲くや雜木の山々に



寒月やとなりの家のかるた會
寒月や夜もすがら鳴く小犬哉

## 雜報

### 學校記事

○奉祝式　十一月十日天朗氣晴瑞雲靉靆として天も亦我皇の聖壽无彊を奉祝するに似たり本校にては當日午後三時より講堂に於て奉祝式を擧行し御眞影を拜し奉り君が代及御大典奉祝唱歌を合唱して七宮校長御大典に關する訓話を爲し三時三十分に至るや校長の發聲にて一同　天皇陛下の萬歳を奉唱し了て閉式せるが森嚴の氣堂に滿ち感激の涙襟を霑すを覺ゆるものありき

○提燈行列　十一月十四日大嘗祭當日奉祝の誠意を表する爲職員生徒一同午後五時より校庭に集合各自球燈を掲げて出發福嶋小學校に至りて町民の提燈行列と合同し之か先頭に立ち先づ大手橋を渡りて上町を上り關所橋を越ゑて向城の各町を練り更に大手橋を渡り下町清水町等を經て中畑に入り廣胖橋を渡りて取つて返し關山公園に登りて萬歳を唱へ夫より關町に出で終に福島町役場前に至り萬歳を三唱して解散せるが人員は本校生徒を合せて無慮數千名に上り各町意匠を凝せる提燈を振り翳せる事とて金龍銀蛇蜿蜒幾十丁に連り實に空前の盛觀を呈しぬ

○賜饌拜戴　豫て地方賜饌の恩命に接したる校長始め教員一同は十一月十六日松本に赴き正午女子師範學校内賜饌場に參入し酒肴を拜戴し同日歸校せり

### 校友會より

久しく沈默を重ねたる辯論會が忘年會を兼ねて十二月十日講堂に開かれた先づ辯士と演題を掲げて見るとー

開會の辭
人生僅二十一ヶ年　北村顧問
理想の功名心　坂本部長
一少にても　吉川光夫君
口の人と手の人　内山伊那登君
政府と議員　唐澤繁夫君
中畑佐耕君
殖民地と國力　内田進之助君
宿命論　北村先生
國家的宗教　長谷部久雄君
雜感　山下不二三君
音樂に就て　杉山義次君
精神統一　澤田富可君
人生と青年の自覺　長坂清人君
立憲思想普及に關する雜感　西澤警察署長
自然と人生　横井正守君
希望　伊東厚君
柔道部設置論　岡西猛君
林業家としての自覺　七宮會長
後藤象次郎を論ず　平田久良治君

因みに演說終つて後坂本部長の餘興として詩吟並びに一同の校歌合唱あり最後に會長の音頭にて校友會萬歳を三唱し午後三時半閉會したるか非常に盛大であつた。終りに今年はあれやこれやの忙しさで開かれなかつたのとそれから菓子代がなかつたからと云ふのでは決してないといふ事を部長に代て附記して筆を擱く。（ゆかり生）

### 會員消息

○樋口智久君は埼玉縣北足立郡大和田町字野火止平林寺專門道場に轉居勉學せられつゝあり

○喜多村明君は今秋除隊の筈なるが更に再役をなし來年度に於て士官候補生の試驗を受くる覺悟の由

○柳澤得衞君は一年志願兵として工兵第十三大隊（越後小千谷）に入營する爲長野小林區署を辭職せり（次で十二月一日同隊第二中隊に入營の由通知あり）

○川合清行君。一年志願兵として豊橋歩兵第六十聯隊第八中隊に入營

○早川一雄君。一年志願兵として豊橋歩兵六十聯隊第五中隊に入營

○田中榮一君。現役兵として豊橋歩兵六十聯隊第二中隊に入營

○新井彌藏君。一年志願兵として宇都宮歩兵第六十六聯隊第七中隊に入營

○高野薫見君。一年志願兵として松本歩兵

五十聯隊第七中隊に入營

○臼井辰雄君、豫備召集として今夏甲府聯隊に入營せし同君は八月豫備試驗の結果歩兵曹長に昇進歸郷せり

○關琴義君。昨冬水戸工兵大隊に一年志願兵として入營せし同君は軍曹となり今十二月除隊歸郷せられたり

○林勘治君。駒ヶ根村諸原秋田木材會所に入所せり

○鹽川金次君。近衛歩兵第三聯隊に在りし同君は本月初歸郷

○遠藤宗作君。十一月老母の喪にあはれ歸郷せられたるが序を以て本校を訪問せらる

○田中榮一君。關琴義君、最近母校を訪問せらる

## 編輯餘錄

○先月の本誌御大典記念號は表紙が内部の紙質と異るのみならず全然離れ離れの感があつて何處となく不体裁であつたのは會員諸君に陳謝しなければならぬが編輯員の素志は記念號であるから全部の紙質を奮發して上等にし第一頁は表題及意匠（御大典唱歌印刷）丈とし第二頁より直ちに本文の記事を印刷！最後の頁丈に記事を印刷せぬ樣にする計畫であつた而して第一頁と最後の頁とは先づ計畫通りに行つたのだが第二頁と第廿五頁に當る處が空明なので可笑しな感じがする其上に表紙の紙と中の紙とが格段の優劣があるのだから頓と調和が取れない編輯子固より責任は免れないが印刷所の粗漏は決して容す事が出來ぬ夫に尤も氣を揉ませた事は記念號印刷の期限即ち十一月の十五日になつて印刷所から表紙の意匠圖案を亡くしたから大体を知らせて呉れとの端書が來た印刷が出來して到着するのは今か今かと待つて居た所へ此始末だから編輯子の失望は實に其極に達した併し捨て置く事も出來ぬから早速長距離電話によつて奮通り大体の意匠を命じ乘れて其意慢を詰責してやつたが亡くしたのは印版屋だと云ふ事であつた而して記事の印刷は全部出來上つてゐるが圖案を亡くした許りに未だ表紙が出來ぬと云ふ事であつた。これで表紙と中とが離れ〳〵になつた理由が判然するであらう、かくて十八日に漸く出來到着と云ふ事になつたのである因に長距離電話架設以來本校では編輯子がイの一番に使用するの光榮を擔つた譯である

○永井綠山兄の玉稿は大典記念號には好箇のものであつたが期日に遲れた爲遺憾ながら本月號に掲載する事とした本誌改良に就て具体的に御意見を伺ふ事の出來たのは是が初めてゞある實行に就ては經費の點もあるから一段の考慮を要すべきであるが意見は意見として廣く會員諸君の腹藏なき開陳を望むものである

○安藤前會長今の林務課長の精力旺盛なことは今更の事であるが先達縣廳員の運動會には委員長となり審判競技に活動されたのみならず競技に加はりて四百ヤード、六百ヤード、戴冠スプーン等に於て皆一等を得て廳員を驚かしたそうで七宮會長の許に大分氣焰を吐いた私信が來て居つた

## 寄贈書目

○『造林者の爲に』二冊　宇佐美周紫君

○北越農林第四卷第十二號　新潟縣加茂農林學校

○名古屋木材月報第五十四號　名古屋材木商同業組合

## 本誌代領收

金壹圓　伊東兵太君
金壹圓　溫井誠一君
金壹圓　宮崎惠喜太君
金壹圓　吉田佐十郎君

大正四年十二月廿三日印刷
大正四年十二月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人　安井正夫

長野市西後町丙二十一番地
印刷者　田中彌助

長野市西後町乙二十一番地
印刷所　長野新聞社活版部

長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　藤澤書店